
リアン 壊れた記憶と絆の世界

FION

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアン 壊れた記憶と絆の世界

【Nコード】

N9533J

【作者名】

FIION

【あらすじ】

世界には様々な人が住んでいる。

あなたの住んでいる世界だけが世界ではない。

あなたの直ぐ近くにも別の世界はあるのだ。

パラレルワールドやらと言われるものだ。

そんな重複世界のなかでオレは大切な記憶を探して彷徨った。

いや、これからも彷徨い続けるだろう。

隣でこいつが笑ってくれている限り……。

まあ、そんなわけで恋愛しながら冒険する　ん？　逆か……？
冒険しながら恋愛する……（？）

あれ、冒険するか？　ってな感じのお話です。

Prologue - 夢 -

握った手を離すことが出来なかった。

離そうとすればするほど、強く強く握ってしまっ。

……でも、やっぱり離さなければいけないんだ。

わかってた……。わかってるつもりだった……。

その手を求めちゃいけないことも、そこにいるのが……あいつじゃないことも。

「……………」

目が覚めるとオレは布団の中で丸くなっていた。

まあ、あれだ、夢を見ていたらしい。

「夢……………」

まだ、はつきりと覚えている手の感触を確かめる様に手を強く握る。

「夢、だよな……………」

もう一度言葉にすると、目の奥に熱いモノが溜まっていることに気付く。

それは、間違いなく涙だった。

いつから涙を溜めていたのかわからない、ただ溢れ出した涙は止まらない。

「はは……………。夢見て泣くか、普通」

しばらく経つと涙を拭い、まだ生温かさの残る手をゆっくりと開く。

手を開くと、手に残った温もりは消えていった。

Chapter 1

廊下は、がやがやと賑わいをみせていた。中には、別のクラスまで足を運んでいる者もいるだろう。

オレは、やかましい廊下を急いで抜け、自分の教室に入る。

「つと……（月見里……月見里……）」

座席表を見て自分の席を確認する。そう、今日は入学式、高校生として新しい生活が始まるのだ。　　つとと言っても、それらしい実感もなく。とりあえず席に着き周りを見渡す。

「知ってる奴は……いないか」

まあ同じ中学から入学した奴は少ないしな……。まだ時間があるのを確認すると、鞆から小説、　　所謂ライトノベルを取り出し読み始める。

（そういや朝の夢、アニメか何かの話だったのかな……）

そう考えるのが一番自然なのかも知れない。妙にはっきり覚えてるし、昔みたアニメが記憶の隅に残っているなんてのは良くある話だろう。

「夢、ね……」

無意識にそう呟くと、ラノベを片手に持ち掌を見つめていた。

「夢がどうかしたのー？」

不意に目の前に顔が現れた。優しそうな女の子の笑顔が向けられている。

「えつと……」

つい言葉に詰まる。突然知らない女の子に声を掛けられたんだ。それにいきなり夢がどうしたとか聞かれても、　　そんな事を考えていると相手が察してくれたのか、隣の机に腰を下ろして口を開く。

「私は、小鳥遊詩歌。えつと、つきみざと君？」

たかなし　　しいか、と言うらしい女の子は、短めの薄茶色の髪を

右の方でくくっている、何とも活発そうな笑顔をした少女のような女の子だった。正直、かなり可愛い。だが、胸がデカイ……。貧乳派のオレにとってこの胸は少々致命的だ。

「つきみざと君……？」

つきみざと……。まず、オレのことだろうな。座席表でも見たのか……。

「オレは、やまなし かける月見里翔」

確かに“つきみざと”と読むが本当は“やまなし”だ。　　と少々威張ってみたりすると。

「ほえー。私より珍しい苗字初めて見たよ……！？　なんでこれで

“やまなし”って読むの？」

などと、質問してきやがったわけだけど……。まあオレが知っているわけもなく……。

「さあ……。気分じゃない？」

つと、詩歌は一人で大笑いを始めた。　　つて、小鳥遊はずるい。読めない名字として有名すぎるだろ……。

「あはは。小鳥遊はねえ、子鳥が遊んでもだい　　」

「知ってる。それは結構有名だろ？」

今度は二人で思い切り笑いあった。　　はあ、完全に向こうのペーjayじゃないか……。まっ、いいけど。実際、この詩歌って子は一緒にいて楽しいと思う。胸以外はどストライクの容姿もある。

ただ、何かがこう……モヤモヤと引っ掛かっていた。

「それで、夢って何のこと？」

思いつきり笑った後に詩歌が首を傾げて聞いてきた。

「……。ん……？」

同じように首を傾げる。

「ほら、さっき言ってたじゃん。掌見つめて、夢がどうとかって」

「あー、今朝見た夢が結構リアルだったなあっと思ってるさ」

詩歌の目の輝きが一瞬増したような気がしたが……。

「へえー、どんな夢なの？」

「何でそんなに夢のこと気にするんだ？」

なんとなく口から出た言葉。詩歌は、はっと息を呑み何故か少し頬を赤らめている。

「いや……。えっと、そのお……」

突然視線を彷徨わせ始めた。んー。変なこと聞いちゃったかな……。

暫く沈黙が続き、担任が教室に入ってくると、詩歌は苦笑いしたまま隣の席に着いた。

入学式から数日後

もう授業も終わり学校に残っているのは、体験入部やらで各々の部活を見学している生徒くらいだろう。ましてや、教室に残っている者など普段ならいないはずの時間だった。

オレの隣の席には、詩歌が座り紙の束を眺めている。オレの手にも紙の束が握られていて、オレはそれを読んでいるわけだが……。

もちろん、教室で二人きりで……。それも隣同士……。嬉しくないと言ったら嘘になる。

しかし、集中できねえ。緊張して心臓の鼓動が速く、大きくなっていく気がする。

いつからか、オレの視線は手に握られた紙の束ではなく、詩歌のほうにいつていた。

1日前 入学式やら実力テストやらが終わり、周りでは、「部活どうする？」など部活の話がメインになってきた。

「部活ねえ……」

もちろんオレにもその手の質問がくるわけで、オレはその度にそう応えていた。

特に入りたい部活があるわけでもなく。だからといって何も入らないのはどうかと思う。などと考えながら部活紹介の冊子をパラパラしていると隣から声を掛けられた。

「入る部活決まったー？」

お前もそれか……。気怠そうに詩歌のほうをむき。

「ただだけど……。詩歌は？」

特に興味もなかったが参考までに聞いておくことにする。

「まあ一応はね……」

詩歌は苦笑いしながらさういうと、言葉を選ぶようにして続けた。

「あのさ、翔って本とか好きだよ……？」

「あー、まあ好きだよ……？」

何で急に本の話になったんだ？ とか考えていると、詩歌が少し言いつらそうに口を開く。

「文芸部とか興味ない？」

「ん？ 文芸部なんてあつたっけ……？」

見ていた部活紹介の冊子をパラパラとめくる。

「ないよ……。だから一緒に創らない？」

「……は？」

職員室、担任の水沢先生のところに行くと、詩歌と二人、職員室の隅のテーブルまで案内される。詩歌が既に話をしていたらしい。

「今日のところは二人か。他の子にも声は掛けたの……？」

水沢先生は少し嬉しそうな様子で詩歌に聞いた。

「あ、いえ……。知り合いも少ないので……」

それから、二人は部活についての話をしていた。まあ、オレは適当に聞き流す。オレが聞いてもわからんし、文芸部設立が成功したとして部長は詩歌がやるはずだ。

「……。まあ、人数がそろわない事には何ともなあ……。せめて小説書いた経験がある奴とかいればいいんだが……」

大体話したい事は終わつたらしい。そう言つて水沢先生は腰をあげようとする。

「ん？ どうした？」

詩歌と水沢先生が突然手を挙げたオレに目をやる。

「えつと……。小説書いたことありますよ。初心者用のサイトに投稿するくらいですけど」

おそろおそろ手を挙げて言つたオレを詩歌と水沢先生の二人は驚きの表情で見つめる。

「ホントか？ それじゃ一つ読ませてくれ」

「え……。やっぱり読みますよね？」

ふう、職員室をでると長く息を吐く。まさか、自分が書いた小説を誰かに見せるときが来るとはな……。詩歌のほうに目をやると、遠慮がちにこつちをちらちら見ていた。

「あー。お前も小説読む……？」

「読むっ！」

案の定即答されたわけで……。頼むからそんな期待の目でオレを見ないでくれ……。

自作の小説を水沢先生に渡すと詩歌の待つ教室に戻った。

「……」

なんか真剣に読んで……。あはは……。オレの書いた小説ですね。

「ふう……」

軽く息を吐くと自分の席。詩歌の隣の席に座り、さっき水沢先生からもらった紙の束に目を通す。演劇の台本に先生が書き方のポイントを書き加えたものだ。

詩歌の話によると、我らが担任水沢は、担当科目は国語。演劇部顧問で文芸部設立時には文芸部の顧問も掛け持ちしてくれるらしい。

『上手いじゃないか。演劇部の台本書いてみないか?』

そう言つて渡された台本……。何で用意されてんだ? とか、いろいろ思ったが、まあ掛け持ちとか楽じゃないだろうし……。受け取つたのはそんな心境なわけだよ。

「……」(やっぱ台本と小説つて全然違うんだな……)

ちらつと詩歌のほうを見ると真剣に小説を読んでいた。その表情が楽しそうだったので少し安心したがやっぱり人に読まれるのは恥ずかしい。

少し頬を赤くし、台本へと目を戻す。……が、集中できねえ。できるわけがない。緊張して心臓の鼓動が速く、大きくなつていく気がする。

いつからか、オレの目線は演劇の台本ではなく、詩歌のほうにいつていた。あと、オレの書いた小説に……。

「……だあ！」

そりゃ叫びたくもなるだろ。こんな状況は初めてだ。ただの沈黙でも耐えがたいのにこの沈黙は無理だ。

「ほえっ!? いたの?」

「いました……。すみません」

あからさまに驚きの表情を浮かべる詩歌につい謝つてしまつてか、気付いてなかったのかよ……。

「小説上手だね。私もこんな風に書いてみたいな」

「そんなことないだろ……」

「一つ聞きたいんだけど、何で小説書こうつて思ったの?」

詩歌は少し小説を読み進めると、小説を置いてオレのほうをむく。多分きりのいいところまで読んだのだろう。

「覚えてない。まあ書くの楽しいしさ、なんか話し考えるのって楽しくない? あ、そっぴや詩歌は……?」

「私? 私は書いたことないからわかんないけど、書けたら楽しいかなつて。それに……」

明らかに表情が曇った。何か言いにくい事があるのか……？ 小説書く理由に……？

「言いたくないなら言わなくていいよ。べつにそこまで聞きたかったわけでもないし」

「言いたくないわけじゃないけど……。うん、ありがとう」

詩歌が俯き頷くと二人とも黙ってしまふ。しばらくの沈黙
破ったのはオレの口から出た言葉だった。

「あのさ、詩歌とオレって昔あったことない？」

Chapter 2

何でだろ……。詩歌を見ると胸が苦しくなる。初めて会った日から、ずっと……。

一目惚れって奴なのか……？ わからないけど、恋とは何か違う気がする。

この気持ちは恋じゃない。あの笑顔を昔見たことがあるんだ。

このモヤモヤした気分は思い出せない苛立ちだろう。なにか大切な事が思い出せない時のそれと良く似ていた。それがもつと強くなつた感じの……。

また、胸が苦しくなる……。詩歌の顔が浮かび遠ざかる……。

『ドージ』

不意に誰かの声が聞こえた気がした。そして、誰かの顔が頭を掠める。

詩歌に似た女の子……。オレはその子を良く知っている……。

知っているはずだった……。

思い出せない……。いや、思い出すのが怖い……？

辛い……。思い出したくない……。けど、思い出さなきゃいけない。何故だかわからないけどそう思った。

詩歌といれば思い出せるのかな……。

思い出したくない何か……。

オレは入学式の朝のことを思い出していた。あの日見た夢のことを……。

「ドージ」

夢で繋いだ手の感触を思い出しながら、そう呟いた。

彼女は窓もなく薄い明かりに照らされた暗い部屋にあった。

ソレは、短めの髪、大きめの瞳、普通よりも少し大きいくらいの胸、柔らかい白い肌、笑えばかなり可愛いであろう口元、それらのパーツを身体に持ち、生きていた。

彼女は、しっかりと血も流れ脈打ち確かにそこにいる。しかし、彼女の心臓は幾重にも重なった部品や歯車で出来ていた。

ソレは、確かに感情を持っているが自分の感情に従うことは出来ない いや、しない。

彼女は、限りなく完全で限りなく不完全な“人の形をした機械”だった。人としては生きていけず、しかし機械と言うよりは余りにも人なのだ。

「ゴメンね……。あなたを作って……」

ソレが何度も聞いた言葉……。彼女を作った人が発した言葉だ。

「なぜ、謝るのですか？」

ソレは、淡々と言い。目の前にいるその人へと目を向ける。

「……。ううん、謝りたかったただだから」

何度も聞いた返答。その人の悲しい顔は見たくなかった。でも、彼女にはどうすることもできなかった。

「あのね。こないだした約束。この部屋から出ちゃダメってやつ……」

……。なしにするから、一緒に外に行こう？」

「はい」

約束 それは彼女にとっては命令だった。作った本人もそれはわかっていただろう。それだけ外に出したくなかったはずだった。けれど、その人は彼女を連れて外に出た。

外に出ると車に乗り人気のない所まで行って車を止める。

「あなたをもつと自由にしておけたかった。敵のいない自由な世界

で……」

「……」

ソレは、黙って聞いていた。胸が辛くなるのを感じながら……。
「そうね……。この“鷹のいない小鳥が自由に遊べる空”にあなたを放ってあげられたら……」

その人は、そういうと空を見上げて少し涼しそうな顔をする。

「鷹のいない空ですか……」

彼女は知っていた。自分が壊されようとしていることを……。彼女を作ったその人にはない。世界の人々から壊されようとしているのだ。

神が自分の姿にまねて人を創ったと言う。人が人を作る

こと。神に近づき過ぎること、は許されることじゃないらしい。そんなこと気にしない人もいるだろう。彼女にもよくわからない事だった。

「……。私を殺して……？」

彼女の製作者。彼女の産みの親である、その人が静かに優しい笑顔を向けてそう言った。

「……はい」

殺したくなかった。けれど、彼女にはどうすることもできない。

「ゴメンね……」

その人は最後にそう言った。ソレは最も辛くないであろう殺し方で自分の親を殺した。

彼女は、泣くことはできた。けれど、泣きかたを知らなかった。

そして、胸の苦しみに耐えられず自分も死のうと思った。

「……」

何度も自分を殺した。親にしたのと同じ方法もそれ以外も……。

彼女は死ぬことも出来なかった。そして彼女はこう思い、口にした。

『べつの世界で生きたい』

それは、彼女が自分の感情に初めて従った時だったろう。口にすると涙が溢れてきた。彼女を作ってくれた人の笑顔、敵の

鷹のいない自由な空を、思つて涙を流した。

『Si - ca』

彼女の首に付けられた首輪にそう刻まれていた。それが彼女の名前だった。

一年に数回、長期休暇の時にやってくる男の子がいた。

私はその男の子が大好きだった。

その男の子が来る度に近所の神社に誘い、みんなで遊んだ。

みんなとは、私の友達、私も入れて4人。男女2人ずつ、その男の子を入れると男子のほうが一人多くなる。

その男の子が来ると決まって鬼ごっこをして遊んだ。私は走るのが好きだったから、みんなも鬼ごっこでいいと言ってくれていた。

その日も、雪の積もった神社で鬼ごっこをしていた。鬼は、その男の子だ。

私を追いかけて、派手に転ぶ。

「雪に慣れてないから転んだんだっ！」

と、転んだまま言っていた。私はその男の子に近づき微笑んだ。

「ドージ」

その男の子に最高の笑顔でそう言った。そして、その男の子に手を差し出す。

その男の子が私の手をとると思いつきり引つ張って立ち上がらせる。そして

「大好き……私と付き合ってください」

私は、どんな顔をしていたらう。その男の子は、しばらく考え込み黙って頷いた。

「大丈夫だよ」

私は目の前の男の子にそう言った。

今、どんな顔しているのだろう。笑えているのかな……？ 悲し
んでいないだろうか……。

「帰ったらメールするから」

男の子はそう言って部屋から出て行った。

「大好き……」

私は男の子がいなくなった場所を見つめ呟いていた。

Chapter 2 (後書き)

『Si - ca』の話は短編として投稿予定だったり……。

Chapter 3

今日も詩歌と一緒に教室に残った。二人で演劇の台本を考えるためだ。

まだ文芸部として活動できるわけじゃないが、水沢先生はこの台本を文芸部が作ったものとして紹介してくれるらしい。部員募集のチラシも用意してくれて、本当に良くしてくれている。

「文芸部、できるといいな……」

そう呟くと詩歌は笑顔で頷いた。

「ありがとね。 私が小説書きたい理由……翔には聞いて欲しいかも」

詩歌は少し言葉を濁らせてそう言った。オレは黙って聞く姿勢になる。

「あのね、笑わないでよ……？ 本の世界って、私たちのいるココとは違う世界なわけじゃん？ それで、そういうのが重複世界パラレルワールドって言うのになって。だったら、それを書くのってすごいことですよ。それに……」

詩歌は少し頬を赤らめてそう言った。続きがあるのかと思って黙っていたが詩歌は黙ったままだった。

「……なんか凄いこと考えてたんだな。確かにそういう考えもあるかもな」

オレは真剣な表情で頷いた。詩歌はそれを聞くと再び話し始めた。「私ね、多分この世界の人じゃないの……。確かに昔の記憶はあるけど、少しずれてると言うか……。変なの」

は……？ 意味がわからない……。

「なにが……？」

「だから、記憶が変なの……。中学より前くらいから自分の記憶が変なんだよ……」

はい……？ 記憶が変……？ オレの表情を読み取った詩歌は再

び口を開く。

「翔だつて、前に言つてたでしょ？ 私と昔会つた気がするとか…

…」

「言つたけど……」

そこでハツと息を呑んだ。オレが詩歌といる時に感じているモヤモヤ……オレも何か忘れてる。大切なことなのに思い出せない……。けど、それは昔の事だぞ？ 重複世界やらは関係のないことだ。

「なあ、オレで良ければ詳しく聞かせてくれ」

気がつくのと、そう言つて詩歌の話しに耳を傾けている。詩歌は少し驚いて嬉しそうな顔をした。

「あのね、中学くらいかな、それから後の記憶はちゃんと私のものだつて確信できるの。けど、それ以前の記憶はどこか曖昧で……。それに私普通に笑えてるでしょ？ けど、中学より前の時、私が笑つてるのが何故か不思議なの。私は笑えないはずなのに泣けないはずなのにつて……」

自分が自分でないような感覚つてことだろうか。本当のことなら中学より前だけつてのは確かにおかしいのかもしれない。

「それで詩歌はどうしたいんだ……？」

「私は、自分の本当の世界を探したい……。だから、いろんな世界を見たかった」

「それで小説か……」

軽く息を吐く。詩歌は冗談を言つてるわけじゃないらしい。

「それじゃ、私は自分の世界を、翔は自分の過去を、目的は一致だね！」

オレは、なんとなく自分が詩歌に対して抱いているモヤモヤを話した。話しておいたほうがいいと思つたからだ。

「いや、全く一致してないし……。てか、何の目的だよ……？」

「んー？ 自分探し？ 大体一緒だと思うけどな」

「そうですか……。てか、オレは昔の事を忘れてるだけだし重複世界がどうか知らないからな……?」

「ホントに重複世界はあるんだよ……。まっ、これからもヨロシクね」

こうして、始動前から文芸部はよくわからん方向に突っ走って行くことになってしまった……。

「夢も重複世界ってわけか……?」

帰り道、遅くなったので詩歌を家まで送りながら呟くように尋ねた。

「ほえ……。私はそう思ってるけどよくわかったね」

「最初に会ったとき、夢のこと気にしてただろ?」

「そうだったね」

「なんか元気がない……?」

元気がなさそうに俯いた詩歌を見て何事かと首を傾げた。

「ん……。翔はどこにも行かないでね……。もう、嫌だから大切なひとが私の前からいなくなるの……」

「大切だって思ってくれてるんだな……? てか、もうって昔何かあったのか……?」

少し頬を赤く染める。やばいドキドキしてきた。

「ほえ? 昔……? なにか……?」

詩歌は明らかに困惑していた。眉間にシワを寄せ、頭を抱え込む。その表情がどんどん険しくなっていく。

「なっ! 大丈夫か!?」

詩歌の肩を軽く掴む。

「ちが、違うの……。私は……」

その後、詩歌が何て言ったのかわからなかった。突然、地面がいや、世界が揺れたんだ。

オレは急いで詩歌の手を握った。そうしなければ詩歌がどこかに行ってしまふ　そんな気がしたから。

気が着くとそこは知らない場所だった。周りには少しの家と一つの神社くらいしかない。ドがつくほどの田舎だった。

「ここは……？」

詩歌が顔をあげる。オレは急いで握った手を離そうとしたが詩歌が握り返してきた。

「わかんないけど……」

ありえない。詩歌はテレポートの使い手が……？

近くにある神社に一人の女の子が……。

「……！？」

オレも詩歌も言葉を失った。そして今度は、オレが頭を抱える番だった。

そこにいたのは、詩歌にそっくりな女の子……。小学校6年生くらいだろうか……？　オレの頭はその女の子を見ると痛みだした。

それに、この神社も景色も、全部オレは知っていた。まだ、あの女の子のことは思い出せないけれど……。

「オレは……」

そう口にする、女の子のほうに歩みだしていた。

「やめておいたほうがいい」

不意に後ろから声が聞こえた。

声の聞こえた方を振り返ると、そこには女の子のような顔立ちをした男が立っていた。歳はオレたちと同じか少し下くらい。髪の毛は肩の辺りまで伸ばしている。キレイな紅い瞳をした　所謂、美

少年だった。

「ボクは、五月七日^{ごいつにち}皇^み ボクも君たちと同じ、ココとは別の世界から来たんだ」

皇は、笑顔でそう言った。しかし、笑顔で恐いこと言いやがる。

「じゃあ、ココはパラレルワールドだとも言うのか……？」

詩歌は黙っていた。ただ、何かに怯えたように……。

「まあ、ボクたちの世界から見たらそうなるね……」

皇は少し遠い目をして言った。困惑しているオレたちを見ると再び口を開く。

「ボクを君たちの仲間に 文芸部に入れてくれないか……？」

は……？ オレは言葉を失った。詩歌も同じらしい。

「えっと、同じ世界の同じ学校なのか……？」

もう頭が真つ白だ……。なにがなんだか……。

「そうだよ。ボクは君たちの隣のクラス。少し見た目が違うかも知れないけれど……」

えっと、どうすればいいんだろ……。ただ、詩歌がコクコクと頷いていた。

「それじゃ、ヨロシクね。早速だけど、今すぐにも元の世界に戻らなきゃ」

皇が微笑んで言う。少し可愛い……。とか、言ってる場

合じゃねえ……。帰るったって、どうやって……？ 歩いて帰れる距離じゃあるまいし……。

「それじゃ、いいね……？」

皇がオレと詩歌それぞれに問いかける。

すると、世界が皇を中心に揺らぎ、気が付けば教室にいた。オレを含めて三人……。

詩歌と……。隣で知らない女の子が笑っていた。

Chapter 4

「ボクは間違いなく五月七日皐だよ」

オレの目の前にいたのは、さつきまで一緒にいた皐……じゃなかった。オレと詩歌は目を見合わせ、その女の子を驚きの表情で見つめていた。

「だから、少し見た目が違うかもしれないって言ったじゃん……」
その女の子は拗ねたように唇を尖らせてみせた。

少し見た目が違うって……。どう考えても少しどころじゃないんですけど……。

「ほら？ よく見れば似てる気がしてくるっしょ？」

幼さの残る顔、肩まで伸びた髪、薄い胸、そして紅い瞳……。確かに男女つて概念を完全に無視することに成功すれば似ていると言えないこともないのかも知れないが……。

「……。誰？」

オレの口から発せられたのはそれだけだった。

「だーかーらー！ 五月七日皐！ ココ以外の世界に干渉する時は男になっちゃうんだよ！」

この皐と言う女の子が言うには、本来なら皐は男として生まれるはずだったらしい。“この世界の皐”がではなく、“他の大多数の世界の皐”である。

そのため、世界全体の価値観からすれば皐は男である、とされるらしい。皐のように女の子から男の子へという大きな変化をすることは少ないが、世界の狭間を越える時に世界はそういった世界全体とのズレを最小限にしようとするとかしないとか……。

皐によると重複世界は大きく分けて3種類あるらしい。

1つは、単純な過去や未来。

2つ目は、この世界とほとんど同じ表と裏のような世界。

所

謂パラレルワールドだろうか。

もう一つは、小説やアニメなどに出てくる世界だそうだ。

そして、重複世界とやらは、お互いの世界に影響を及ぼさないように、干渉しあっているのだと言う。

臯も無条件に重複世界を行き来できるわけじゃないらしく、あまり詳しい事はわからないらしい。上記はすべて臯の仮説だと思っただけで構わない。

とにかく重複世界とやらは存在した。

それは、詩歌が本当に自分の世界が別にあるのかも知れないということ　つまり、詩歌がこの世界の人間じゃないかも知れない可能性が高まったってことだ。

詩歌を家まで送り、オレは臯と二人で残りの帰り道を歩きながら、ずっと気になっていたことを尋ねた。

「なあ。何であの時止めたんだ？」

「あの時って？」

「ほら、別の世界に行った時にオレが女の子に……」

「まただ……。頭にあの時と同じ痛みが広がる。」

「頭、痛いのか？　多分ね、月見があの子に会ってしまったら、きっと月見も小鳥も耐えられない……」

「どういう意味だ……。というか、月見と小鳥、誰だ……。頭が痛くて突っ込む気にもなれないが。」

口を開こうとするオレを臯は人差し指を唇に置き止める。

「月見には、その頭痛よりも辛いことがあるかも知れないってことにつこりと笑いながらも淡々と　その口調には、はつきりとそれ以上聞くなと言っ意思が感じられる。それは、臯にとって不利益だからとかじゃない。ただ、オレを心配してくれているのだ。」

「……。臯は、詩歌のこと、　あの子のこと知ってるのか？」

「ボクは何も知らないよ……」
皐のその言葉に嘘はなかった。それがわかったからオレはもう何も言えなかった。

「月見、なのかな……。ボクの探してる人」
皐は、ベッドに横になりながら、そう呟いた。

皐が初めて別の世界に行った時、自分の姿が男だと言うことに驚愕した。最初の頃は、そういうもんなんだと思っていた。

しかし、世界を越えても皐が女のままの姿だった時があった。その時、知ってしまったのだ。自分が男に生まれるべきだったということ……。

「ボクは……。間違った存在なの……？ ボクは、なんなのさ……」
まだ幼かった皐は膝を抱えて泣いていた。

「ボクは、ボクは……」

皐のキレイな紅い瞳は、暗く濁っていた。

まるで、彼女には二度と日の光は当たらないような感覚すら覚える。

「キミは、皐だろ……？ オレにとって大切な人だ」

不意に皐に光がさした。温かそうな手が皐にむけられている。

皐の濁ってしまった目には、その光は眩しすぎた。顔を見ることができそうにない。

「……」

ただ、皐は黙って頷くと、光から伸びた温かい手に手を伸ばす。

「皐……。オレが皐を認めてやる。皐は間違ってるんじゃないんだ」

皐は光のほうへ引つ張られ、そして元の世界に戻っていた。

皐の紅い瞳には濁ったものなんて残ってはいなかった。

ただ、真っ直ぐに、あの光を探すんだ。
幼かった臯が心に誓った、臯の夢……。

『大丈夫か？』

詩歌は黙って携帯の画面を見つめていた。今にも崩れそうな表情を必死に堪えて……。

翔からのメール。

「慰めてるつもりなのかな……」

『大丈夫だよ』

詩歌はいろいろ言葉を選び、指を動かしたが、結局それだけをメールして携帯を閉じた。

それから、すぐに返信は来たが詩歌はそれを読まなかった。

何て書いてあったとしても気持ちを抑えることはできそうになかった。

「私は、誰なのかな……？」

世界に裏切られた感覚……。詩歌の周りの全てのモノが人が嘘じゃないかとさえ思えてくる。

けれど、翔だけは違った。ちゃんと自分を見てくれていた。

この気持ちは恋なのかな……。不意に自分の声が頭に浮かぶ。

『ん……。翔はどこにも行かないでね……。もう、嫌だから大切なひとが私の前からいなくなるの……』

自分が翔に言った言葉。

「大切な人、か……」

少し痛みだした頭を押さえ、呟いた。

Chapter 5

オレたち3人は今日も学校に残っていた。

臯が仲間に加わり、文芸部候補だったオレたちは文芸同好会という形で正式に活動が許可された。

あの日 別の世界に行ってしまった日から数日が経ったが、誰も重複世界とやらの話はしようとしなかった。

そんなオレたちが学校に残って何をしているかと言つと

文芸同好会らしく、演劇の台本を考えているわけだ。

もう大体の話は決まっている。

それは、一人の少女の話だ。 いや、二人と言つたほうが適当かも知れない。

とある世界に一人の少女がいた。その少女には友達と呼べる友達がいなかった。

そこで、彼女は1つの人形を作ることにした。寂しさが癒えると思つたから。友達が欲しかったからだ。

一所懸命、気持ちを、心を込めて一人の女の子の形をした人形を作っていく。

もちろん、少女もそれが本当の友達になるなんて思っていない。ただ寂しさを癒して欲しかった。そばにいてくれる存在が欲しかったのだ。

人形が完成した時、その人形は人の心を持つてしまった。

少女の友達が欲しいと言う気持ちが強すぎたのだろう。 人形

は少女に笑いかけ、そして少女とおしゃべりをした。

次第に人形は動けるようになり、その身体も人間に近いものに変わっていった。

少女は、「気持ちが悪い」と罵られ、その人形以外、誰もまとも

に話してくれなくなった。

少女は泣いた。けれど、その人形を嫌いになることはなかった。しかし、その人形は周りの人間に受け入れられることはなかった。邪険にされ、中には人形を燃やそうとする人まで何人も現れた。少女の親も例外ではない。

そして、少女は旅に出ることを決意する。その人形を連れて。誰からも非難されない二人で住むことが出来る外の世界。そんな世界を夢見て。

少女たちは外の世界に行くことができた。二人で誰にも邪魔されずに住むことが出来る世界。

しかし、少女はそんな世界を望んでいたわけじゃない。望んでいたのは、『友達が欲しい』それだけだった。

彼女は、自らの作った人形に自分を殺すように命じる。人形は彼女を殺し、自分も後を追おうとした。

しかし、それは人形だった。自分のことを傷つけても死ぬことが出来なかった。

しばらく、一人の時間が続いた。人形は、自分が最初から人間だったらと何度も思った。

ある時、その人形から涙が流れた。

その時だった。神様が人形の元に現れ、その人形を殺してくれたのだ。

それから、少女と人形は、仲の良い友達として生まれ変わり、今も楽しく暮らしている。

大体こんな内容だ。演劇って言うよりは絵本だ、とかツッコミたいかも知れないがそれは胸にしまっ……。

「これが、詩歌の作りたかった世界か……」

この話を考えたのは詩歌だ。オレは話を聞き、まとめる係り。臆は……。何かしたか？

「え、あ……うん」

「小鳥の話、すごい面白いよ。あ、面白いつていつても悲しいし……」

「臯はそのまま長考に入った。何が言いたいのか……。」

「この話、ずっと考えてたのか？」

「臯は無視決定つてことで。」

「ほえ……？ えっと、考えてたつて言うか……。」

「詩歌は言葉を探しながら、少し顔を俯ける。」

「知ってたの……。」

「はい……？ どこかで聞いたことがある話だつてことだろうか。」

「確かにありそうな話なのだか。それだけなら、どれだけいいか。」

「それじゃ、この話が小鳥の元いた世界？」

「お前はずっと長考でも何でもしてる！ とか口には出しません。」

「わかかないけど……。こんなような話を昔の記憶だけど、確かに」

「この世界を知ってるの……。」

「話を知ってるじゃなくて、世界を知ってる……ですか。」

「わかったところで、臯の世界でその世界に行けるのか……？」

「月見は冷めてるね……。どうせ、ボクの力は行きたいって思った」

「世界に行けるほど便利じゃないですよー」

「臯に横目で睨まれる。」

「前から聞こうと思つてたんだけど、詩歌は自分の世界を探して、そこに帰りたいのか？」

「臯を無視して詩歌をまっすぐ見つめる。臯も同じように詩歌を見」

「ていた。」

「ほえ……？」

「だから、仮に詩歌がこの世界の人じゃなかったとしても、詩歌はココにいればいい。無理して探す必要ないんじゃないかって」

「月見は、優しいねー」

「臯が肘で突いてくる。……はい、臯のガン無視が決定いたしました。……」

「わかんない……。でも、この話を考えてる時も、今読んでみても、胸がこつ締め付けられるみたいになるの……。どうしたい、とかはわかんないけど、私は探さなきゃ行けないんだと思う」
詩歌は真剣な眼差しでオレと臯を交互に見つめる。

と、急に世界が傾くような感覚に陥る。

「月見っ！ 小鳥の手を……」

臯が何かを叫んでいる。すると、詩歌がオレの手を堅く握る。

何が起きたのか考える時間なんてなかった。世界が曲がったかと思つと、オレは知らない場所にいた。

どうやら、別の世界に来てしまったらしい。

Chapter 6

いきなり町のと真ん中に立ってるけど、大丈夫なのか……？

町の人たちはオレたちが最初からそこに在ったような顔をしていた。

しかし、詩歌の顔を見ると小さな声で何やら話し始める。

「この世界がビンゴだったのかな？」

「うおいつ！？」

そこにいたのは、男の臯……。わかっているてもビックリするよな、普通……。さつきまで女の子だったんだから。

「そんなに驚かなくてもいいと思うけどな……」

「いや、びびるだろ」

「そんなことより、歓迎ムードじゃなさそうだよ？」

臯が集まってきた人たちを顎で指す。

「詩歌。大丈夫か？」

町の人々を見たまま詩歌に顔を向ける。

「シーカ？」と、何人かの人が口にすると、目の前から竜が飛んできたりしたわけで……。

「やばそうだね……」

臯が奥歯を噛み殺す。

「ちが、違うの……！ 私は、何も……！」

詩歌は頭を抱えて叫びだす。

わけわかんねえ……。詩歌は、頭抱えてるし、竜は襲って来るしな。

「臯っ！ この前みたいに元の世界に……」

「できない。もうすこし、この世界に身体がなれないと、この世界を抜けることはできないんだ」

どつするよ……？　こんなに危ないなんて聞いてないんですけど……。

竜はオレたちを襲っている、と言つよりは詩歌だけを狙っていた。だからオレなんかも避けたり出来てるわけだけど、そろそろ限界だ。

「もう少し……。よし、飛ぶよっ！」

詩歌を振り回しながら竜を何とか避けていると、少し離れたところにいた皐がオレと詩歌の腕を掴む。

「……っ！」

オレは尻餅をついた。皐はオレを見下ろし笑いを堪えている。

「あれは何なんだ……？」

「ボクは知らないよ……？　けど、小鳥なら……」

詩歌は頭を抱え丸くなっていた。

「ふざけるなっ！　こんな状態の詩歌に何がわかるって！」

「月見は、男には厳しいよね……」

皐は、はぁ、と肩をすくめてみせる。

「人の家の中で騒ぐのは関心しないよ……？」

突然、知らない声が響く。皐がすぐに身構え、オレと詩歌の腕を掴もうとする。

「やめたほうがいいよ。キミのそれ場所が特定できないんだろ？」

「……」

皐は言葉に詰まり。だが、いつでも飛べる体勢をつくる。

「キミのその能力がなんなのか知らないけど。町の連中に見つかるのはまずいだろ？　オレはキミたちの味方をするよ」

町の連中……？　世界を抜けてはなかったのか……。

「何のために……？」

皐が淡々と警戒心剥き出しで問いかける。

意外と頼りになる

んだな。

「その女の子が知り合いに似てるからかな？ あと、キミたちも
だけど」

そういうと微笑を浮かべる。

その顔は、オレと同じ顔だった。 正確には、オレより年上の
オレの顔がそこにはあった。

「僕は、やまなし かける月見里翔」

そう言っ て握手を求めてくるオレ……。

「そうですか……」

呆然と苦笑いするオレを臯は大笑いで指指し、年上のオレは首を
傾げていた。

詩歌を眠らせて、年上のオレ この世界のオレからこの世界に
ついて聞いた。

この世界では、“ドール”と呼ばれる機械を一人一体以上は
持っているのだという。

さっきの竜もそのドールというものらしい。

ドールを作る人達は人形技師、ドールを操る人達を機功師という
らしい。

この世界の人々は、ドールを操ることで発展してきたという。

戦争はドールを使い、労働などもドールが行う。

より良いドールを作れる人形技師が称えられ、よりドールの能力
を惹きだせる機功師が称えられる……そういう世界なのだそうだ。

「それで、町の人たちは何で小鳥に あの子に反応して襲い掛か
って来たんです？」

臯が、この世界のオレに聞いている。

「それは、オレの口からは言いたくない事件なんだ……。町の連中が勘違いしてキミらを襲った。それは謝るよ」

彼はオレたちに頭をさげた。

オレはそこにあつた機械　ドール、だっけ？　に興味を引かれていた。

何体かある中で一体だけ、まるでオレを呼んでいるような感覚。

「あー、そこにあるドールは主を選ぶんだ。キミも選ばれたんだろ
う」

そういうと彼はそのドールに少し触れ、オレの前に持ってくる。

「こいつは癖があるが凄いドールだ。キミにやるよ」

「え、オレに…？　けど、金とか持ってないし……」

「金はいらぬ。これはオレが作ったものじゃないしね。それに主を選ぶって言ったろ？　貰ってやってくれ」

くれるって言うなら、もらうけどさ、さっきみたいに狙われるかも知れないし。

「ありがとうございます……」

受け取ると、その機械の目に光が灯り、そのドールはまるで生きているかのような存在感を放ち始めた。

「キミは、何かあるかい？」

彼は臯にも問いかける。

臯は黙って真っ直ぐ一体のドールに近づく。

「その子が」

そう言つて臯にもドールを渡した。

なんか、オレ、かなり良い人じゃね？

しただけ。

まあ、別の世界のオ

オレが貰つたドールは、小さなドラゴン。頭の上に乗るくらいのサイズで、四枚の翼を持ち、白銀の鱗に覆われている。

臯が貰つたドールは、精霊のようなものだろうか。赤色の液体が女性のような形を作っている。その形は、何にでも変化することが

できるようだ。梟がいろいろと命じて試していた。

「ドールにも心はある。特にその子たちは。それだけは忘れないでくれ」

この世界のオレは真剣な表情になる。

「あ、後で地下室に来なよ。その子たちの戦いかたを教えてあげる」
そう言って、この世界の翔は歩き去った。

Chapter 7

「誰だ……」

皐と地下室へ行くと、この世界の翔と、その後ろに女の子が立っていた。

「来たね。それじゃ、はじめるか……」

そう言っつて、この世界の翔が歩み寄ってくる。

「はじめるっつて何を……」

オレと皐はどちらからか口を開くと

「輝夜、桜夜……」

この世界の翔の後ろにいた少女　ドールがぼんやりと光りだす。そして、そのドールの頭の上から桜色の光が皐に向かって放たれる。

「なにを……！」

「練習だよ。オレは教えるの下手だしね……。何て言うのかな、大切な人への想いをドールへ伝えるみたいなの……」

この世界の翔が肩をすくめてみせる。　そんなこと言ってる間にも、皐には桜色の光が近づいてるわけで……。

「颯!」　「紅椿!」

オレと皐はほぼ同時にそれぞれのドールの名前を呼んだ。

この世界の翔が言うように想いを颯へ向ける。

詩歌への想い……。　なんだか、胸が苦しくなる。　詩歌、

大丈夫かな……。　詩歌の影に別の女の子を感じながら……。

桜色の光が皐に届いた時、水しぶきが飛び散ったかと思うと、そこに皐はいなかった。

そして、何故か皐は翔の後ろのほうへ飛ばされていた。

「不意打ちはしないほうがいいよ。輝夜の仕様は、剛力だから……」

はい……？ 何が起きたのかわからなかった……。

「あー、やっぱり、キミら2人を相手するのは辛いかな……」

「「はあ……？」」

オレと臯の声が裏返る。

「キミは、五月七日臯つゆり さつきだろ……？」

この世界の翔が臯のほうを見て、次にオレのほうを見た。

「それでキミは、オレか……」

そう言うと、輝夜と呼ばれたドールの上から一体のドールが臯のほうに飛んでいき、輝夜はオレのほうに走ってくる。

「颯！」

オレが颯の名を呼ぶと、颯から銀色の光が四つ放たれ、輝夜を囲み動きを止めた。

「流石だね。初めてでそこまで能力を引き出せるのは凄いよ」

自分で自分のことを褒めてる様で恥ずかしかったのか、この世界の翔は頬を赤らめる。

「でも、それじゃ、あの子は最上もがみ心か……？」

最上……？ 誰だ……。頭が痛む。

オレは知っている……？

「ぐは……！」

オレのもとへ颯が飛んできたりして、オレはその場に倒れ込む。

『ドージー！』

女の子の声が聞こえ、その顔が頭に浮かぶ。

この世界のオレが何か言ってる気がするが無視で……。

オレは……。心って子を知ってる……？

あの後気絶したらしいオレは、布団に寝かされていたみたいだ。起きたのに気が付いたこの世界の翔は、起きるのを待っていたように口を開く。

「あのさ、キミら強いみたいだし。一つ頼まれてくれないかな……」

?

Chapter 8

「月見、4体ずつでいいよね？」

オレの後ろ　背中合わせになった臯が周りの蜘蛛を顎で指す。

まあ、蜘蛛というか……。あれは何なんだ？

鎌みたいな口の機械に足が8本ついている。それもかなりデカイ

……。

オレなんか丸呑みだねアレは……。

しかも、8体もいるわけで……。まあ、とりあえず

「颯ッ！」

オレの横のドールが銀色の光に包まれる。

そして、その光の中から放たれた4本の銀色の光、それが1体の蜘蛛を貫く。

「えっと、確か……。颯の基本仕様が質量変換で、オレとの能力が呪縛系の技、だっけ……？」

オレは、横の大きくなったドラゴンを横目に呟いた。

この世界のオレから教わったことだ。　まあ、半分くらい理解できてないけれど……。

「とりあえず、行けえっ！」

オレは、ドールに　颯に詩歌への想いを伝えていればいい。

あれから、この世界のオレと練習してきたように。　勝てたこととはないけれど……。

オレたちがこんなことになっているのは、この世界のオレの頼みを聞いたからだ。

その頼みの内容は

『1人のドールの顔を見て来て欲しい』

現在、実質上この世界を束ねているとかいう奴らのところにある

ドールの顔を見て来い、というのが彼の頼みだった。

彼は、颯や紅椿の兄弟と言えるドールを集めているらしい。それらのドールは、オレたちが颯たちを受け取った時に言ったように『主を選ぶ』のだそうだ。

そのうちの1体であるドールの顔を見て来て欲しいと言う。正直、意味不明だったけれど、彼の表情が真剣だったから、オレたちはその頼みを受けたのだ。

それで、何で変な蜘蛛に襲われているかと言うと　少し前のことになる

この世界のオレから戦い方を教わったオレと皐は、巨大な建物の前に立っていた。

「これはデカイな……」

「月見、ビビってる？」

皐……。男にそんな嬉しそうな微笑を向けられても嬉しくないぞ
むしろ、キモイ……。

「ん……？　月見？」

いや、ホント……。

「なんか、あっさり入れてくれたな……」

「コレクターってのは、コレクションを自慢したいもんなんじゃない？」

「知らん」

「ホント、月見って男には厳しい……」

皐が何かブツブツ言っている間に、目的のドールの所まで着いたわけだけど……。

「顔を見てくるだけでいいって言ってたっけ……?」

オレは多分震えていただろう。目の前にいるそれは……。

「ボクたちじゃ、助け出すなんて無理だって言ってたでしょ? それに、この世界の月見でも助けようとして何度も失敗してるって」

そう……。この世界のオレがオレたちに頼んだのは、もう自分がそこに行くことができないからだ。

「だけど……ッ!」

「月見、ちゃんとあの子の顔を見て、笑ってればそれでいいって言うてたでしょ?」

確かに彼女は笑っていた。柔らかそうな頬を朱色に染めて、優しくそんな微笑みを浮かべている。

しかし、その胸は開かれ、おそらく心臓にあたるであろう場所にある歯車、それに棒が刺され歯車の動きは止められている。

やっぱりダメだ。怒りが込み上げてくる。

「なあ、ドールってのは心があるんだよな?」

オレは震える声で臯に問いかける。

「はあ……。しょうがないし付き合っよ」

臯は肩を竦めてみせる。

オレたちのドール 颯と紅椿が光に包まれたかと思うと、オレたちは何処かに飛ばされた。

何が起きたのか考える暇すらなかったね……。

ただ、そのとき見たんだ。そのドールの、彼女の首に付けられた首輪を……。

『S i - c a』

その首輪に刻まれた、彼女の名前……。

Chapter 9

『ここは……？』

1人の少女　小鳥遊詩歌が目を覚ましたのは知らない部屋の中だった。

彼女には自分が何でここにいるのかわからなかった。

「起きた？　あー、頭痛むの？」

「え……？」

そこにいたのは間違いなく翔だった。　ただ、自分の知っている月見里翔じゃなかった。

なんというか、背は高く、どこか落ち着いた雰囲気、　とにかく、彼女が知っている翔よりも年上なのだ。

「あ、オレは月見里翔な。えっと、大丈夫か？」

自分がずっと頭を抑えていることに気付いたのはその時だった。

この翔は自分の事を知らないみたいだ。それなら、ここは元いた世界じゃないのだろうか。

詩歌は頭を抑える手を外しながら、そう思った。

「あ、私はたか」

「名前は言わなくていいよ」

そう言って彼は、詩歌のことをどこか懐かしむような、温かい優しい目で微笑んだ。

詩歌は自己紹介も出来なかったことを齒痒く思いながらも彼に黙って微笑み返した。

たとえ、彼が詩歌の知っている月見里翔じゃなかったとしても、翔のすることは信じられる。詩歌にはそう思えた。

「それじゃ、オレは行くよ。少ししないといけないことがあるから」
そう言って彼は立ち上がった。

「あ、君はこの家から、いや、この部屋から出ちゃダメだよ。あと、暇だらうけど、テレビもラジオもつけないでくれ」

立ち去る彼はそう言い残し、部屋から出て行った。

ゆっくりと閉まるドアの隙間から、黒い着物を着た少女が彼に付いて行くのが見える。その頭には、着物とは不釣り合いな大きな帽子をのせている。

「あはは……、かなり怪しいですよ。部屋から出ないでテレビもつけちゃダメって……」

完全に閉まったドアを見つめながら、詩歌はそう呟いた。

しかし、彼女は、この部屋から出ないで彼の言うことを守るだろう。

あれが知らない人なら、すぐに逃げ出していたらうけど、あれは翔なのだから。

いや、まあ、知らない人であることに代わりはないのだけれど……。どんな翔でも翔のすることは信じたいと思うから。

「それにしても、私は何でここにいるんだろう……」

自分の記憶を整理してみる。いつものように翔と皐の3人で演劇の台本を書いて……、確か完成したんだ。それで……。

そこから先のことは思い出せなかった。おそらく、その時にこの世界に来たのだろう。

もしそうなら、あの時のように翔と皐も来ているのだろうか。それならどこに……？

いくら考えてもわからなかった。わかるわけもないのだが……。

とりあえず、自分のいる部屋を見渡してみる。やっぱり、そこは知らない場所だ。

と、頭をかすめる黒い着物を着た少女とその帽子。やはり詩歌には見覚えのない人だった。

けれど、詩歌は、それがあの人じゃないことを知っていた。あの

人はいつも1人だったから……。

「あの人って誰だよ……」

詩歌は再び頭を抱え、目を閉じ横になった。

Chapter 10

「とりあえず、行けえっ！」

蜘蛛を貫く4本の銀色の光のうちの1本が大きくなり。残りの3本は蜘蛛から離れ、もう1体の蜘蛛を貫く。

ここまででは上手くいっている。けれど、皐は大丈夫だろうかから敵はあと2体……。

正直、2体以上の呪縛は出来ないし、オレと颯にドールを傷つける力はない。

「颯、急いで……」

1本の銀色の光で貫いている蜘蛛のほうに力を込め、その光が強くなる。

こうすることで、ドールをしばらく停止させることが出来るとか。

「あと、少し……」

動きを封じていない、残り2体を横目に見ながら。嫌な汗が流れ落ちる……。

「へ……?」

突然、蜘蛛が後退し始めた。皐のほうも同じらしい。

「えっと……」

えっと、そこに固まってる2体の呪縛も解いたほうがいいんじゃないか……。

「へえ……。キミのそれすごいんだねえ……。私の力でも動かないかなんだ……」

なんとというか、とにかく甘ったるい声が聞こえて来る。

そして、さっきの蜘蛛、皐が倒した1体とオレが動きを止めている2体を抜いた、5体の蜘蛛が飛び上がった。

オレたちに襲い掛かるかと思ったら、颯の力で縛られている蜘蛛2体を壊し始めた。

「何を……?」

「次はキミたちよ……」

甘ったるい声の主が見える。美しい黒髪をした背の高い女性だった。その肩に乗ったドールは、小さな蜘蛛だ。普通の蜘蛛よりは大きいんだけど、今まで戦っていた蜘蛛よりは断然小さい。

5体の蜘蛛がこちらを向く。と、同時に紅色の霧が広がった。

皐の紅椿だ。相手にはこちらの位置がずれて見えたりとかするらしい。

「とりあえず、オレたちは盾でいいよな?」

「だね。月見はボクのことしっかり守つてよ」

軽くウインクして走り出す皐……。お前、今は男だぞ……。

皐が紅椿で敵を翻弄し、ナイフで相手のドールの急所をさす。そして、オレは颯の4枚の銀色の光を盾にして皐を守る。それがオレたちに出来る戦い方だ。

皐は、いろいろな世界にいけるようになって、ある世界で護身にナイフでの戦いかたを覚えているらしい。かなり強いんじゃない……? さっきの戦いであの蜘蛛の急所も見定めてあるみたいだし。

しかし、敵の5体の蜘蛛はさっきまでとは違いかなりの連携だった。

皐はなんとか1体を倒したが、それ以上倒すことが出来ずにいた。「ちよつと、やばいかなあ……。相手は人形でボクは人だよ。体力が……」

皐が弱音を吐き始めた時

「えー、あー……」

どこからかノイズが聞こえ、続いて聞こえてきたのは、間違いなくオレの声だった。

Chapter 11

『えー、あー……』
スピーカーから聞こえてきたのは、間違いなく月見里翔の声だった。

『Si-ca』というドール……。いや、少女のことを思い出して欲しい。

彼女のことを知らないという人はいないだろう。彼女は人間に近づきすぎたドールとして、世界中から罵倒され続けた。

確かにオレも彼女のことを壊そうとした。べつにそのことを悔いではないし、今さら許して欲しいとも思っていない……。

けれど、やはり間違ったことだとは思っている。これを聞いてくれる人の中にも過去のことに何か思うところがある者もいるはずだ。

それでも、世界が彼女を認めようとしないう。そのせいで、誰も彼女を認められないでいる。

だから

もう1度考え直して欲しい。彼女が本当に……。
本当に、存在してはいけなかったのかを。

人型のドールならいくらでもいる。

心をもったドールだって……。というか、どんなドールにだって心はある。

自分のドールを見てみなよ。そいつは、あんたにとって何なんだ？
共に戦う 仲間、相棒、友……？
愛情を注いだ 家族、息子……？

皆が自分のドールを大切に想うように最上心もがみこころという少女もSiicaを大切に想っていた。

最上心は、べつに神に近づきたかったわけでも、決してなりたかったわけでもない……！

ただ、友達が欲しかっただけなんだ。

心が……、あいつがどんな想いでドールを作ったのか、誰も知らないだろ……。

あいつは、人形技師としても機功師としても完璧すぎた。

あいつは、1人が好きだから、1人でいたわけじゃない。

あいつが1つのチームにつけば、戦争がおきる。

あいつが誰かと仲良くなれば、そいつはたくさんさんのチームに狙われることになる。

そうやって、あいつは1人でいるしかなかったんだ。誰もが身に覚えのあることだろ……。

だから、少しでも……。変わりたいと思うなら。オレを手伝ってくれないか……？

オレは、Siicaを助ける。たとえば、世界が変わろうとしないのなら

オレは世界を敵にまわしても、Siicaは助ける。それで、もしできるなら、それで世界を変えるよ。

人もドールも傷つかないでいられる、戦争のない世界を……！！！！

最後になつたけど、オレと戦ってくれる人は、ここに電波塔前に集合。時間はどれだけかかってもいい。

それじゃ、待ってる。

それは、とても文章とは言い難い言葉だったけれど。

その文章でちゃんと伝わるとは思えない。そんな文章なのに、それは、どこか暖かく、頭ではなく心に伝わってくる。響く、と言った感じだろうか。

けれど、人を動かすのは、そういった言葉なのかもしれない。

現に……。いや、わざわざ言う必要もないだろう。

まあ、強いて言うなら、この行動が世界を変えることになる。それも他の世界を巻き込んで。

町中の人々は、テレビの砂嵐、ラジオのノイズ……。そして、自分の作ったドール、自分と共に育ってきたドール、共闘してきたドール……。

それらを見つめ、小さく、とても小さく頷いていた。

暗がりの中、ラジオの音と2人の話し声だけが聞こえて来る。

「ふう……。あいつ、やっとふつきれたみたいだね。行こう、水月すいげつ」
紅い瞳の青年と、白い髪、白い着物を身に着けた少女が立ち去り、ラジオのノイズだけが静寂を破っていた。

そして……。

「ふふ……。やるわね、キミ？」

甘ったるい声が響く。

紅い霧がたくさんの蜘蛛を包む中、それは翔へと向けられていた。

「な、何を……？」

「だからあ……。キミも今放送室を占拠してる子と同じ、キミでし

よ？
「

それは、翔たちが同じ存在であることを確かに理解していた。

Chapter 12

「同じ、キミでしょ？」

紅い霧の中でその言葉がオレの頭に響いていた。

しばらくの沈黙、紅い霧が服にまとわりついて気持ち悪い……。

いや、実際には、その霧は臯の操るドールなのだ。服にまとわりついたりしてるわけがない。

ただ、目の前にいる彼女の存在に威圧されてるのだとオレに気付く余地があつたのだろうか。

と、黒くて長い髪をもった彼女は真っ直ぐオレに近づいてきた。臯の紅椿の力は確かに発動しているにも関わらず、真っ直ぐオレのほうを見て近づいてくるのだ。

その長い黒髪が指先をかすめた気がした。すると

「ふふ……。私が何者なのかって？ そうね……。神……？」

この女は何を言ってるんだ……。神って、神様とか言われてるアレだよな……。

「えつとね。この世界ではないけれど、最初の世界？ それを作つたのが私なの」

彼女は真っ直ぐにオレを見つめ、全てを見通しているような目でオレに微笑みかけた。

「まあ、信じなくていいけどね。それじゃ、行きましようか。ここ
のキミが待ってる所へ」

オレが待ってる場所……？

余計なことを考える時間なんて全く無く、糸のようなものが身体を通つたかと思うと目の前は光のようなものに包まれた。

電波塔を占拠していた青年　　月見里翔は電波塔前の広場を見下ろし、ただ呆然とその光景を眺めていた。

かなりの数の人が、ドールが、集まって来ているのだ。その数は百や二百じゃきかないだろう。

これだけの人数が自分の話を聞き、賛同して集まってくれたのだ。世界はこんなにも簡単に変えられてしまうものなのだろうか……？

「とりあえずは、大成功ってことかな？」

そう言う翔は、窓から外へ飛び出した。

結構な高さのところから飛び降りた彼を見つけた何人かが彼を指差す中、ふいに空気が揺らいた。

気が付くとそこには2人の少年が、そしてその周りに現れたのは、現在この町を実質的に束ねているチーム、そのチームの所有する蜘蛛型のドールだった。

つまり、自分たちが助けようとしているドールを捕らえているチームのドール　やはり敵はやってきたのだ。

何体かのドールが飛び出したが何かがおかしい。蜘蛛が避けようともせずに落ちてくるだけなのだ。

そして　しばらくの後、電波塔前の大衆には怒りが溢れ帰り、それは混乱という言葉がふさわしい、仲間割れとしか言いようがない事態に陥っていた。

「あの女何をしたんだ？」

混乱の中心で2人の少年が息を潜めている。

「知るかよ………」

「ホント、月見は男に厳しい………」

まだ、そういうこと言うのかよ。

「で、どうするの………？」

「どつするって言ったってなあ」

どうしようもないだろ……。周りじゃ、ドール同士の喧嘩が始まるし、それも百人単位の喧嘩だ。正直、オレにはどうにもできない。「ふふ……。それじゃ、もう一回、会場を変えようか……?」

それはもう聞き慣れた、甘ったるい声だ。

すると、蜘蛛の糸がオレと臯を同時に通り……。

次にオレがいたのは、詩歌に似たあのドール、その目の前。

まわりにいるのは、オレと臯、この世界のオレ、そして、紅い目をした美青年、五月七日臯なつきだった。

それと、それぞれのドール、他にもたくさんの動いていないドールたちが周りに置いてあった。

「1人、呼んでない子が混ざってるみたいだけど、まあ、別にいいわ……」

甘ったるい声と共に現れた彼女の周りには、1体の小さな蜘蛛を除いて、ドールは1体もいなかった。

「あの、蜘蛛には気をつけなよ。さっきの混乱を起こしたのはあの蜘蛛だ」

この世界のオレはそれだけで伝わると思っているのだろうか……。長い黒髪をなびかせた彼女は薄く微笑んだ。

Chapter 13

「それにしても……」

ここはどこだろう？ 確かに知っているはずなんだ。

そんな脳裏に浮かぶのは、あの黒髪の女の子……。

それと、あの帽子 桜夜だ。それでも……。

「だから……。あの人って誰なんだよ……」

誰もいない部屋の中で1人、詩歌は頭を押さえ、ただ閉まっている扉を見つめていた。

「ここが……私の世界」

知らないけれど、知っている世界。私はここに帰るべきなのかも知れない。でも……。

『詩歌は自分の世界を探して、そこに帰りたいのか？』

翔が口にした言葉……。

「そんなのわかんないよ……」

この世界に来れば、この胸の痛みは消えると思ってた。なのに……もつと痛くなって、苦しくて……。

『仮に詩歌がこの世界の人じゃなかったとしても、詩歌はここにいればいい』

私はいてもいいのかな……。

私の居場所はどこにあるの……？ 私は……。

シトシトとした雨が室内に降り始め、だんだんと激しい雨に変わっていく。

この世界の臯のドール 水月の能力らしい。それから、何が起きたのかわからなかった。

この世界の臯が見えなくなったと思った瞬間、周りにいるドールたちの中から8体のドールが動きだし、気が付けば臯と水月は8体

のドールに囲まれて倒れていた。

「キミたちは、戦おうとするなよ。次はオレが行く」

この世界のオレが前にでると、共に前にでた輝夜と桜夜が薄い光に包まれて……。

『その子は輝夜、今そこにいる水月の姉妹機よ。あなたが望むならあげてもいい。けど、この子を扱うのは難しいわよ？』

ドールと呼ばれる機械を使役する世界、その世界の翔と輝夜、そして臯が出会ったのは何年前のことだった。

『どのチームにも属さない最高の人形技師がいる』　ただ、力を求めていた頃の翔は、この噂に何かを感じ、その人形技師を探し続けた。

その人は、案外簡単に見つかった。

2体のドール、1人の少年を連れていた彼女は、翔の話を適当に聞くと、翔を真っ直ぐ見据え口を開いた。

「力が欲しい、ねえ？　その子は輝夜、今そこにいる水月の姉妹機よ。あなたが望むならあげてもいい。けど、この子を扱うのは難しいわよ？」

それは翔にとって予想外な言葉だった。そんなに簡単に渡しているドールなのか……？　ホントは凄くないんじゃない……？　そんな疑問が頭をよぎる。

「タダでいいのか……？　ドールは2体しか連れてないみたいだけど」

「んー？　ドールってのはね。主を選ぶの特に私の……」

そこで、言葉を詰まらせ、首を横に振ると、言葉をたした。

「私と私の唯一の弟子、私たちが作ったドールは主を選ぶ。だから、あなたが輝夜の主になるべき人なら、あなたが持つるのが普通でしょ？」

「それって、あんたらの作るドールに心があるってことか？」

「ううん。それは違う、私たちのだけじゃなくて、どんなドールにも心はあるの」

彼女は優しい目で真っ直ぐ翔を見て言い放った。

「どんなドールにも……」

翔は真剣にその言葉を受け止めようとしているのが彼女にもわかっただろう。

「んー？ キミはドールを扱う時どうやってドールと繋がるの？」

「そんなの、こう……気を飛ばす感じで」

「そうね。ここにいる人たちは、みんな感覚だけでドールと繋がることができる。でもね、あれはドールと気持ち 絆を共有してるの」

気持ち、絆の共有……？ そんなの翔は聞いたこともないことだった。首を傾げる翔に彼女は再び言葉を繋げる。

「簡単なことよ。あなたの大切な人への思いをドールにぶつけるだけいい」

そう言うと、彼女は微笑み。翔に輝夜を渡した。そして……

「そうね。そこにいる子が水月が選んだ人。戦ってみるといいわ。

私もあなたがホントに輝夜にふさわしいか確かめられるし」

その言葉を聞くと、そばにいた少年が一步前にでた。その少年はキレイな紅い瞳をしていた。

Chapter 14

輝夜と呼ばれているこの人型のドールは確かに人形なのだけれど、まるでそこに生きていたかのようだった。

近くで見、触れてみれば、たいていの機功師は気付くだろう。この子は、並のドールじゃない。当然、この子を作った人形技師彼女も並の人形技師ではないだろう。

彼女の話も本当だということだろうか……。

「そいつが気に入ったなら早く始めようぜ。水月を貰った時から、輝夜と相手してみたかったんだ」

翔と対峙するように立っている少年 皐は、その紅い瞳を輝かせ、せしげに笑みを浮かべていた。

そして、その横にいるのが水月 まるで、輝夜と対照的になっている、輝夜の姉妹機だ。

輝夜が黒なら、水月は白、そんな印象を受ける、2体の姉妹。

まあ、髪の色やら着ている着物がそうなのだから、おそらくそういうつもりで造られたのだろう。

黒髪に黒い着物姿の輝夜と淡い水色の髪に白い着物姿の水月。その姉妹は美しく、何か惹かれるものがあった。

「えっと、輝夜……？」

翔は輝夜に気を向ける。 しかし、輝夜はそれに応えてはくれなかった。

『大切な人への想いをドールにぶつけるだけでいい』

気持ち絆の共有……。すると、輝夜が薄い光を放ち始めた。

「ふーん。初めてでそれだけの力を出せるんだね。じゃあ、始めようか水月」

同じように水月が光を放ち始め、その光は淡く皐をも包み込んでいく。そして

目の前にいた いや、いるはずの皐と水月の姿が見えなかった。

これが水月の能力……？　こんな能力聞いたこともない。

「水月の基本仕様は、隠密、つまり気配を消せるの」

気配を消したところで近くに隠れるところなんてない。姿が見えなくなるほどにその能力は完璧なのか……。

「それじゃ、輝夜のは……？」

「それは秘密。その子が欲しいなら自分で見つけなさい」

彼女はそう言いながら微笑んで、オレたちのことを優しく見つめている。

見えなくても、攻撃の瞬間なら相手の場所がわかるはずだ。

それに、それだけの能力を積んでいるなら、攻撃に関しては、それほど特化していないはず……。

翔はそう思い、さらに輝夜へと想いを向ける。

しかし　力の差は圧倒的だった。目の前で踊るように傷ついていく輝夜に翔は胸を熱くするだけだった。

想い……。大切な人への想い。翔は、藁をも掴むように、その答えを探した。翔には心から大切だと思える人なんていなかったのだ。しかし、目の前の光景は我慢できない。翔は奥歯を噛み締める。

大切な人なんていないけど、誰かが、輝夜が傷つくのは、嫌だ。

その時、輝夜の感覚、というのが適当だろうか。そうだったものが細部まで伝わってくるような気がした。

「あの子たち、合ってるみたいね。まあ、だからあげたんだけど」
遠くから彼らの戦いを見守っていた彼女は少し浮かれた調子でそういった。

「輝夜は月をも穿つ剛力。　水月は水面に映える月。あの子たちは、水面に映える月さえも穿つことができているのかしら」

そして、彼女は楽しげにその場から離れていく。

その表情は、嬉しさとも安心とも、ましてや、悲しさや寂しさ、とも違う、決意にも似た表情で口元を固く結んでいるようにも見え

る。

おそらく、この世界のオレ　翔は苦戦しているのだろう。
2体のドールで8体のドールの連携を抑えているのだから、無理
もない。

そんな彼に疲れの色が見え始めた時、8体のドールのうち2体が、
さらにもう2体、計4体のドールの動きが止まった。

何が起きたのかはわからなかったが、おそらく倒したのだろう。
隣にいる臯も何が起きたのかわからないという様子で、その紅い瞳
を興味津々にその戦いへと向けていた。

その時、周りに置かれているドールが動いたことに彼女、いや彼
は気付いただろうか。

ここは、無数のドールが置かれている、ドールの保管場のよ
うな所だ。

そして、オレたちが対峙している女、そのドールの8本の脚は、
8体のドールを操ることができる。

つまり敵は、ほぼ無限にいる軍隊のようなものだ。不幸なことに
オレたちのなかに動かないドールを攻撃するだけの度胸のある奴も
いない。

そんなオレたちに、この軍勢を切り抜けることは、難しいだろう
……。

Chapter 15

目の前で私に似た誰かが息をなくす。鮮明に思い浮かぶその景色に詩歌は息が詰まる。

私は自分の世界を求めた。そこが見つかってしまった後のことなんて考えてもいなかった。

私の居場所……？ ココじゃないことだけは確かなのだろう。世界から拒絶される感じ。私は自分の世界から逃げ出したんだ。逃げる場所を探して、そこに逃げ込んだ私が受け入れられるわけがない。受け入れられて良いわけがない。

「私は、私は……。あの人を殺した……？」

あの人 私に似た誰か……。私はあの人を殺して、自分を壊したという事実。

詩歌自信なんのことだかわかっていないのだろう。

忘れていた記憶の断片がココにいることを詩歌の存在を否定してくる。

そして、もう1つの記憶。月見里翔と過ごした誰かの記憶。

その記憶の断片が詩歌の目を熱くさせる。

『ゴメン。ゴメンね……。翔、大好きだよ……。？』

その記憶の持ち主である彼女の周りには涙で濡れた書きかけの手紙が何枚も破られていた。

詩歌には、その記憶の中の手紙を読むことはできなかった。読めるわけがなかった。

「私は誰でもない誰か……」

詩歌は混乱する記憶の断片の中に自分の存在を確認できずにいた。「……探そう」

この世界の翔には申し訳ないが、詩歌は部屋をでることにした。

自分がなくなるのは怖いから。自分の世界が私の居場所でないのなら、今度は居場所を探そう。

最初は躊躇し、けれどしつかりと部屋を後にした。

「臯、あっち行ってお前も戦ってこいよ。休んでばっかじゃられないだろ？」

オレのそばにいるよりも、この世界の翔と臯、あいつらのそばにいた方が安全だろう。だから

「あー、そうだね。でも、月見は？」

「いや、ちよっと、腰抜けちゃって……」

肩を竦めて、あははと笑ってみせる。

「それなら、ボクが月見を守らなきゃ」

「いや、いいよ。向こうも逆転してきたみたいだし、こっちに構ってる余裕ないだろ。それに、男に守られたくない」

臯は少し怒ったような顔になったが、そんなことを気にしている余裕はなかった。背中を流れる嫌な汗を隠すのに必死だ。

「むー、ホント男には敵しいよね。ちゃんと隠れてなよ！」

臯はそう言うと、紅椿で身を隠し戦闘に加わって行く。

向こうで動いている敵のドールは5体、つまりはこっちに3体いるってことか……。

できるだけ静かに颯の四枚の銀色の光を盾状に展開する。と

同時に周りのドール達のなかから3体のドールが動き始める。

それらの攻撃を四枚の盾で防ぐ。ギリギリだけれど、自分の身を守ることにくらいできるはずだ。隙があればしは、颯の力で縛ってしまえばいい。強制支配がきかなくなるとか何とか言ってたしな。

「ふーん。臯ちゃんは逃がしたんだねえ……。やっぱりキミたちはイレギュラーだよ……」

独特の甘い声が近くに聞こえる。近くにいる、というか、すぐ後ろにいる……。

嫌な汗が身体中からあふれ出し、いろいろな言葉が喉で詰まってでてこない。

「どうして、あの子を捕まえているかって？ それは、世界を守るため。わたしのぎむだからね。」

まるで、すべて見透かされているように彼女は話始めた。

「世界は自らの変化に耐えられないでいる。最初、世界は1つだった。でもね、分岐し、様々な世界に分かれ、その力を失っていった。もう世界は耐えられないかも知れないの。」

いつからか、その声に独特の甘ったるさはなくなっていた。

「今のこの世界に新しいものを作る力なんてないの。まあ、もともと新しいものが生まれるなんてイレギュラーだったのだけれど。ただ、他の世界と同じ人が少しずつ違う、けれど同じ生活をする。それが今の世界たちのありかたなのね。けど、そんな世界に生まれるはずのない命が2つの世界にだけ、2人生まれてしまったの。その子達を調べれば、世界を救う手立てになるかもしれない。世界を作ってしまったものとして、それは義務でしょ？」

義務……？ 世界を救う手立て……？ それらの言葉が頭の中を駆けずり回る。

その中でも、2人と彼女はいつたのだ。1人は詩歌のこと、目の前にいる彼女のこと、彼女達は“1人”だ。なら、もう1人は誰のことだ……？

「……月乃輝夜^{つきの かくや}。彼女は人間になるはずよ。」

そう言うと、もう1つの戦場を見る。

「なら……、世界を救いたいなら、こんな……。」

「無理矢理しなくてもいいって？ 私はね、不器用なのよ。誰かと手をとるなんてできないの。そんなの間違ってる、とか思わないのね？ あなたは強いのか弱いかわからない。あなたは何でココに来たの？」

「オレは……。」

「意味もなく世界を越えられるのは強さなのかしらね。」

これを会話というのだろうか……。なんだか疲れる。1つ気が付いたことがある。彼女はオレたちをイレギュラーだと言ったのだ。

つまり

「そうね。状況を打開できるとしたら、彼らの強さじゃなくて、あなた達の力。そして、それなら、私は止められないし、あなたになら可能なはずよ」

ため息混じりに敵にお墨付きを貰ってしまったのだが。彼女が可能だというのなら、可能なだろう。

四枚の銀色の盾で敵3体を弾き飛ばすと、颯の質量変化を颯の翼
四枚の銀色の光に適合させる。オレは、詩歌と皐と、3人で元の世界に帰りたい。そのついでにココの詩歌も助けられるのなら、それに越したことはないだろう、と。ドールの力 大切な人への思いを颯に集中させて。

「私の負けみたいね……」

四枚の巨大な光は全てのドールを包むと強制停止ではなく、全てのドールにオレとのつながりを共有させる。複数のドールを操ることとはできないが、他のつながりを断つだけの力を質量変化で補うことは可能だったらしい。

「そのドールの力じゃないわよ。それがあなたの強さ」
彼女はクスクスと微笑むと、彼女の肩にのった蜘蛛から4本の糸のようなものが放たれる。

2本は、この世界の翔と皐を。1本は皐を。もう1本はオレを突き抜ける。

そして世界が暗く、どこまでも落ちていくような浮遊感に包まれる。

「ふふ、あなたは絶えたのね？」

肩に蜘蛛を乗せた彼女の視線のさきには、自らの汗でビッシヨリと濡れた大人の翔の姿だけがあった。

「他の奴らに、何をした？」

「皐くんには、恐怖を。皐ちゃんには、絶望を。もう1人のキミに

は、幸せを。そして、あなたには、希望を与えたつもりだったんだけどね」

何で、この子がココにいるのかわからない、といった顔で翔を見つめる彼女は面白そうに口元を歪めた。

「偽りの世界の希望にすぎるほど、オレはやわじゃないみたいだからかな」

「ちゃんと、心に触れて、一番染みるのにしてるんだけどね」

大袈裟にため息をついてみせる彼女に、この翔は苛立ちを隠せない様子だった。

「それじゃ、キミにも絶望を与えてみようかしらね？」

翔は身構えるが、それを可笑しそうに彼女は微笑み……。

「違うわよ。1つ教えてあげるだけ。キミは、心ちゃんを助けられなかったことを覚えていたわよね？」

それは、この世界の出来事ではなくて、別の世界での翔のことだ。翔にも、別の世界からきた自分に会うことで確信していたことだった。だから、一言だけ呟いた。

「やっぱり、そうなんだな」

「それね、心ちゃんが幼くして死んでしまう世界には条件があるの。心ちゃんが死んでしまうのは半々くらいかな。その条件はね、

キミと出会うことなの」

翔の胸に、様々な最上心もがみの顔が浮かんだ。それは翔の知っているもの、知らないものも含まれていた。

「な、それって……」

「どんな世界でも、最上心と月見里翔が出会ってしまった世界では最上心は幼いうちに死んでいる。ちなみにね、キミと出会わなかった最上心は幸せに暮らして、年老いてその人生を終えている」

心にぽっかりと穴が空くような感覚が翔を襲う。

「それで、あいつは……、別の世界からきたオレは……？」

「最上心と出会ってるわよ。彼らが幼いうちに、最上心は自ら命を絶っている。おそらく、そのショックで翔は過去の記憶を失ってい

「るみたいね」

Chapter 16

「ここは……」

歳は小学校高学年といったところだろうか

ヤマナシ
カケル 月見里翔は、母方

の実家に来ていた。翔の住んでいるところから、だいたい半日から1日くらいかかる距離にあり、長期休暇の度に来ていた場所なのだが……。

なんだろう……世界とズレている感覚というのだろうか。確かに昨日までの記憶はある。だけど……。

と、翔の頬がほんのりと赤く染まる。

「はあ……。頭でも悪くなったのだろうか。……いや、もともと悪いか」

照れ隠しなのか、心の中でため息をつき頭を振る。雪で凍った狭い道を抜け、待ち合わせである神社へと足を進める。といつても、母の実家からは目と鼻の先なので、ほとんど歩かないのだが。

「べつに待ち合わせる必要ないと思うんだけどな」

呟くと、やはりその頬を赤く染めた。

もがみ
しゅう 最上心、彼女との出会いは、奇跡だったのかも知れない。

たまたま彼女が母の実家の近くに住んでいて、たまたま話して、たまたま同年だっただけのことだった。

こういうのを人は運命というのかも知れない。気が付くと翔は心を好きになっていた。

本来なら出会わなかったかもしれない。すれ違うだけだったかもしれない。……いや、すれ違うだけだったはずだ。一緒に話して、仲良くなつて。そんな偶然が

今、誰かに運命を信じるかと聞かれたら、素で信じたいと願望系の返答をしまうことだろうと翔は思った。

しかし、翔はその想いを伝えることはできないと、隠さなければ

いけないと、幼心に理解していた。

遠すぎるのだ。半年に一回しか会うこともできない人にこの想いを伝えてしまったら……。そう想っていたのだが

そんなことを考えている間にも、翔の頬は赤くなっているわけだが。そうこうしている間にも目的地だった神社に着き、手ごろな木に腰をかける。

「やっぱり来てないか……」

細い道路を挟んだ先にある家を見ると、その視線を神社内の空地へと、そして自分の掌へと移す。

昨日のことを思い出し。すでに赤くなっている頬を更に赤く染め上げる。

昨日はいつものように　といっても半年に一回ほどの母の実家に滞在している間だけなのだが、この町に住んでいる友達と鬼ごっこをしていた。

翔が鬼で心を追いかけていた時だった。翔は転び、心は手を差し伸べてくれた。

その手をとると　その、なんとというか、告白……。？　されたのだ。

一瞬戸惑い、そしてゆっくりと小さく頷くことしかできなかった。だから、今日は伝えようと思う。好きだって伝えてもいいんだとわかったから、今まで我慢してきた想いなのだから。翔はそう決意して、心を待った。

「やっぱり待ち合わせる必要なかっただろ……」

集合時間になっても現れない心に呟いた。そして、さつき見ている家を見る。

ドタバタという音が聞こえてきそうな気がして、翔は頬を緩ませる。

やはり、ドタバタと乱雑に玄関の扉が開かれ、心が満面の笑顔で手を振ってきた。

遠くでトラックが走る音が翔の耳に届き、何か既視感のようなものに襲われる。

『だめだ。来るな……！』

叫ぼうとした。いや、叫んだのだが言葉にならない。

心は道路の脇まで走り寄ると止まって手を振ってくる。少し頬が赤い気がするのが何だか嬉しかったのだが、トラックの近づく音によって胸が締め付けられるような痛みに襲われる。

そして 翔と心の間を走り抜けたと思われたトラックは、スリッパしこんな細い道では行き場もなく、ただそこに横向きに倒れていた。

心が立っていた場所にはトラックの積み木であろうものが散らかっているだけだった。

そして、救急車やらパトカーやらの音が聞こえ、救急車が去っていても、翔は動けないでそこにいた。ただただそこで見ていることしかできなかつた。

「何ばーつとしてるのさ？」

不意に明るい笑顔が顔の前に近づけられる。短めの黒髪で、大きな瞳や笑顔が何とも活発そうな女の子の顔である。

それは、間違いなく最上心のものだった。前にある細い道の先を見ると、先ほどのトラックが何もなかった様に通り過ぎていた。もちろん救急車やパトカーが来た形跡もない。

ナンダツタンダ……？ やはり頭でも悪くなったのだろうか。

大きく頭を振ると、目の前の女の子に微笑んだ。

「ここは……」

間違えようもなく、幼い自分が迷い込んだ自分の世界の何処かの時間軸であることを女の 本来の姿である皐は知っていた。

あの時のこと忘れられるわけがないと皐は思った。それが自分の生きる糧で望みであることを彼女は知っていたからだ。自分の淀んだ瞳を想像して頬が緩む。

あの時、あのままだったら自分はどうなっていたらろうと考えると皐は笑わずにはいられなかった。こんな性格になれたのもあの時があったからこそなのかも知れない。

「ボクは……。間違った存在なの……？ ボクは、なんなのさ……」
不意に聞こえたその声は、まだ幼いころの自分のものだと思はすぐにわかったが皐は黙って見守ることに決めた。だって、あの光
おそらく月見里翔であろう、あの人が助けしてくれることがわかっているから。

だから、頬を緩め優しく微笑んでいることができた。

そして、皐のそのキレイな紅い瞳が濁ってしまったあの時のことを思い返した。

その日もいつものように世界を越えた。まだ幼かった皐は不
定期に訪れる、その世界を越える瞬間が楽しみでしかたなかった。

自分は他の人ができないことができる。他の人が見ることのでき
ない世界を覗き見ることができる。そのことが楽しくて、ただただ
嬉しかった。

けれど、その日はいつもと違っていた。普段なら男の子の姿にな
ってしまう皐の身体が元の姿のままだったのである。

だからといって、あまり気にも留めずに世界を見てまわった。こ
の世界は、自分のいた世界に似ているタイプの世界だった。ファン
タジーな世界がお気に入りだった皐は少々不服だったが、自分の知
らない世界には変わりないので冒険をしっかりと楽しんでいた。

しばらくして、1つの傷を発見した。

その傷は、皐が付けた傷だった。

もしも、元の世界がわからなくなったらと、世界を越えるということが1度だけ怖くなったことがあった。その時に自分の世界の目に付けた傷だ。

つまり、その傷は世界を越えることができる皐　自分だけが付けることができる傷だ。

それが意味するのは、もちろん　ココが自分の住む世界だということ。

少し様子が違うのは、過去か未来か、おそらく未来だからだろう。

そのことで気付いてしまったことがあった。自分が男に生まれるべき、間違って生まれてきた存在なのだと。

それなら、今、女の姿なのも、男の姿になっってしまうことも理解できる。

自分以外の皐が男だから、世界はそれに合わせて皐を男にしていたんだ。生じる誤差を減らす。そういうことなのだろう。

それに、自分だけが女だから、間違っている存在だから、自分は世界に縛られないのだろうと確信した。

自分の好きだった能力がまさか、ただのバグだったなんて……。急に居場所を失った気がした。

ただ適当に彷徨って、1つの学校に入った。なんとなく廊下を進み、奥のほうにある教室に入ると床に座り込んだ。

休日なのだろうか。人のいない少し薄暗い学校は、その時の皐には居心地がよかった。

だんだんと膝を丸め、ついには膝を抱えて頭を埋めた。

その時の皐の紅くキレイだった瞳が暗く濁っていたことは言うまでもないことだろう。

Chapter 17

「ここは……」

男の臯である彼が立っていたのは、二度と来る事はないと、来たくないと思っていた。彼の故郷にあたる場所だった。

彼はただ懐かしいようなその町を歩いていた。

ただココにいるだけで苦しくなる、熱くなる目が彼を不機嫌にさせた。

当時、まだ子供だった臯は自分は1人なのだと信じていた。

同年代の子供たちからは「ウサギの目」と馬鹿にされ。

大人たちからは「悪魔の眼」と忌み嫌われた。

彼を生んだ親でさえも、彼のその赤い瞳を嫌っていた。

そして、彼は1人であることを選んでしまった。

そんな時に出会った1体のドールにだけ自分の思いを伝えていた。彼の機功師としての腕はかなりのものになっていった。

自分を認めてくれるものがみつかったと思っただのか、紅い瞳の少年はただ強くあるうとした。彼のその非凡な才能もそれを後押ししてくれていたのだろう。

けれど、彼の両親も町の人々も認めてはくれなかった。

彼の両親は、町の人々に愛される人形技師だった。彼らが作るドールは戦闘用ではなく家事などの生活に用いられるドールだ。

そして、この町は機功師のいない人形技師だけが住む町だった。

彼が力をもったために、やはり彼は「悪魔の子」と呼ばれるようになっていた。

そして彼は町を捨てた。いや、町から逃げたと言った方が適當だろう。町から逃げ、過去から逃げ続け、気が付くと彼は最強の機功

師と呼ばれるようになっていた。

小鳥遊詩歌は、人の気配のしない町の中を頭の痛くなるほうへと、ただただ走っていた。

いろいろな記憶の断片が詩歌にそうさせていた。痛む頭を抑えることもせず、ただただ走り続けていた。

「私の居場所なんてどこにもないのかな……」

彼女は自分が誰でもないことをしってしまった。彼女の涙は自らの心に影を作る。彼女にとっての光を覆い隠すように。

『どうして、あなたが泣くの……？ あなたはあなた、押し付けたのは私だよ……？ あなたが苦しむ必要なんてないはずでしょう？』

あなたは私じゃない、あなたなのだから』

最上心は詩歌の中で静かに呟く。その言葉が詩歌の耳に届かないことは知っていたけれど、彼女にできたのは呟くことだけだった。

『悪いのは私なんだよ……？』

『私がべつの世界で生きたいと望んでしまったから、あなたは私の夢を叶えてくれただけ……。私の居場所はあなただよ……。？ 私の居場所を作れたあなたが自分の居場所を作れないわけがない……。』

シーカは夢の中で呟いた。届かないかもしれない言葉を夢の中で呟くことしかできなかった。

『もう、誰かが傷つくのは嫌』

「ただいまあつと……」

大人の翔と長い黒髪を携えた女が対峙するなか、頭を掻きながら現れたのは男の皋だった。

「あら？ 早かったわねえ」

耳に残る甘ったるい声が皋をイラつかせる。

「他の奴らに何をした？」

「ふふ、同じこと聞くのね。ちょっと心に触れて、私の創った偽者の世界に飛ばしただけ」

こいつは何を面白がっているんだ。いや、面白がってなんかいない。笑っているのは口だけじゃないか。

「お前は何者だ？ なんて、そんなことができる？」

「私は神よ。最初の世界を創った、ね？」

「やっぱりだ。こいつは自分を偽っている。まるで

「名前は？ お前の名前」

「あら、そういえば初めて聞かれたわね。そうね……。私は、ルシファー。でも何で？」

ルシファー……魔界の王ルシファー、確かにもっと早くに聞いていれば、名の通りだと思っただろう。けど、こいつは……知り合いにそっくりな表情をするから。だから、わかってしまったのだ。こいつは、彼女は悪いやつじゃない。

「あなた、不器用なだけなんだな」

そう言っって苦笑する彼に彼女は目を細めるだけだった。それは彼女にとっての戸惑い、だった。

皋は最強と呼ばれてもなお孤独に恐怖した。そんな彼だから、孤独に敏感だったのかもしれない。

『孤独』 彼女の感情はそんな言葉で表現できるものではないこ

とが臯にもわかっていた。

この女は何を背負っているのだろう。なぜ、自分を偽ってまで敵であろうとするのだろうか。

臯が気付いたのは奇跡だった。彼女は創るのが上手だったから。彼女の偽りを見抜ける者がいるはずがなかった。

それでも、臯には気づくことができた。それは、彼女によって創られた、“彼の恐怖の世界”に飛ばされたことが影響していたのだろう。

臯は恐怖から逃げ出した。逃げ切る力があつた。そして気が付かないうちにその恐怖は水月や翔の存在によって、恐怖ではなくなっていた。

けれど、臯は逃げ続けていたから、そんなことにも気付けなかった。恐怖でないことに恐怖し続けていたのだ。

そんな彼を助けてくれたのは、この目の前にいる彼女なのかも知れないと。

「あんたは、何を背負ってる。何のために自分を創る？」

その言葉に彼女は大声をあげて笑い始めた。

しばらくの間、彼女の笑い声だけが響く、臯と彼女のやり取りに翔の意味がわからないといった様子でただ自分と心のことだけを考えようとしていた。

「ふふ、この世界の人には教える気はなかったんだけどねえ……」

細められた彼女の目に、どこか寂しげなものが移るのが、臯にはもちろん、翔にもわかった。

「私は最初の世界を作った。自分のためにね。そして、世界は分岐していった。始めのうちは、止めることもできたかも知れない。けれど、止めなかった。だって、面白かったんだもの。少しずつ違う世界。大きく違う世界。そのどれもが、私にもそんな可能性がある

んじゃないかって、分岐して行く世界が楽しかったのよ」

早口に、まるで誰かに言い訳するようにそう言つと、彼女は更に話し続ける。

「だけど、世界の分岐、それは私が与えた力じゃない。つまりね、分岐し続けている世界は自らの変化に耐えられなくなってきた。このままじゃ、世界は壊れるかもしれない。それは私にもわからないことだけれど、いつかは壊れてしまつと私は思う。私はそれを止めたいのよ。私が創ってしまった世界だから。それが、私の義務だから」

臯にも翔にも、理解できる話ではなかった。けれど、彼らには一つの疑問があつた。

「それと、あの子が、あのドールが何か関係があるのか？」

先に口を開いたのは臯だった。それは翔にとって驚きだった。臯と彼女は何の接点もなかったはずだから。それに臯の口調には、今にも叫び出しそうな棘のようなものが見え隠れしていた。彼はそんなに感情を表に出す人間じゃないはずだったからだ。

「あるわよ」

その言葉は翔にとって驚きと同時に聞きたくない言葉だった。しかし、この感情が何なのか翔にはわからないでいた。

「弱つた世界は、同じ人間が少しずつ違う世界を送るだけの世界になつていたの。大きく違う世界に分岐できたのは最初の頃だけ。今の世界に新しいモノを創る力なんてないはずだった。それなのにね彼女は生まれてしまったの。この世界ともう一つ、あの子達の世界でね」

あの子達とは、この世界に現れた翔たちのことだろう。

「それにね。キミにはもう言つたけど、月見里翔と最上心が出会うか出会わないかで、世界が変わる。それは、この広すぎる世界のなかで小さなことだけれど。ありえないことなのよ。今の世界にとつて、それは大きすぎる変化なの。だから、キミたちには何かがある。世界を救えるかもしれないのよ」

握った手の温かさが翔には何だか不思議な感じだった。確かに嬉しい。心といれること、好きでいていいんだとわかったこと。でも

「……………どうしたの？」

考え込んでしまっていたのだろうか。心に引っ張られていたはずの翔は立ち止まり。顔の前には心の顔があった。

「あ、いや、なんでもないよ」

「そっか……………」

彼女の表情が少し曇った気がした。それは見たことのない表情だった。

「あのさ、ホントに私でいいの？ だつてすぐに会えなくなるし。

ホントはね、すっごく悩んだんだよ。翔に気持ちを伝えてもいいのかつて。でも、伝えなかつたら絶対に後悔するつて。けどね、伝えても後悔してる自分がいるんだよ……………」

翔がずっと悩んできたことと同じだ。心も同じことで悩んでいたんだと思うと自然と頬が緩んだ。けれど、今、翔が悩んでいることはもつと別のことだったのだが、この翔にはそれがわからない。

「それさ、オレもずっと思ってた。……………何ていうか、その、オレもずっと……………」

どうしてか続きの言葉が出てこない。好きだつて、たったそれだけの言葉が出てこない。

恥ずかしいとか、そんな理由じゃない。何でだか、その言葉を口にしてはいけないような。

「翔？ 泣いてる……………？」

頬を伝う熱い線を心が優しくなぞる。なんなんだよ……………。

「あそこ、座ろ……………？」

優しく心が促してくれる。

小さな公園のベンチに2人で座ると、手を重ね。静かに気持ちを

吐き出す。それは意味不明なことを言っていただろう。心は静かに手を握ってくれた。

「オレ、言えないんだ。口に出しちゃいけない気がして。何て言うか、幸せが怖い？ 違う気がする。オレは言えなかったから、だから……。あの時……。オレは」

オレは痛む頭を片手でおさえながら、心の手を握る手に力を込める。

「何か、少しだけわかる気がするよ。ん？ わかんないのかな……？ 私もさ、翔とこうして居られることが不思議なの。ホントは一緒に居られなかったはずだから……。？ 何言ってるんだろうね。自分でわからないや」

そう言って笑う彼女を翔は何を言うでもなく見つめていた。

「私ね、夢を見たの。翔とね、私以外の女の子と一緒にいる夢。その子と翔、同じ学校に通っててね。その子ね、私と似てるんだよ。それで、私も翔のそばに居たいって思って、あの子だけずるいって。それでね、告白したんだ。……けどね、今わかったんだよ。あの子、私じゃないけど私なんだって。私の夢を、私のわがままを、叶えてくれる子なんだって。あの子はあの子、私は私、けど、あの子と私は一緒なの。何言ってるんだろうね。けど、それが事実みたいなんだよ、不思議なことに」

そう言って立ち上がろうとする心の手を更に強く握っている自分がいた。どうしても離せなかった。

強く痛みだす頭が、2人の女の子のことを思い出させる。

1人は、事故で走れなくなった足を引きずって謝りながら自らの命を絶った女の子 最上心。

もう1人は、自分の世界を探したいと頭を抱えていた女の子

小鳥遊詩歌。

彼女たちはとてもよく似た顔をしていた。

「どうして……？」

今、来るはずだった光が来ない……。

それどころか、人の気配すらしない。皐は、文芸同好会の部室で膝を抱える少女へと視線を移す。

自分がこの教室に足を運んだ時、やっぱりあの光は月見だったのだと確信した。なのに……。

「ボクは、ボクは……」

「なんで、どうして……」

誰も来ないわけがない……。だって、それだけが皐を認めてくれるものだったはずだから。

誰も来ない……？

「ありえない。だって、ボクの光は、あれがなかったらボクは……」
呟いてみたところで誰も来る気配はなかった。そんな、どうして。そんな感情が皐に押し寄せる。

けれど、皐のキレイな紅い瞳は再び濁ることはなかった。

月見と小鳥、彼らに出会うことで皐も成長していたらしかった。

「月見は男には厳しい……か」

思わず苦笑してしまう。月見は男の姿の皐も、女だと接してくれていた。それに気付くのに時間はかかってしまったが。

「はあ……。自分の想い人が自分だとはね」

皐は、膝を抱える少女へと歩み始める。決意に満ちた紅い瞳はいつもより一段とキレイで、濁った目には眩しいくらいの決意だったのかもしれない。

Chapter 19

気が付くと、元居た場所　　たくさんのドールたちが置かれたあの場所へと戻っていた。

どうやら臯も同時に戻ったらしい。互に見つめ合うと、何故か笑いが込み上げてきた。

臯は何か決意に満ちた紅い瞳の行き場をなくし、キョロキョロと間抜けな顔をしていた。

かく言うオレもひどい顔をしているのだろう。何が起きたかわからないうえに、いろいろな記憶が頭の中を駆けずり回っていた。

なのに何故だろう。臯の顔を見たら安心できた。笑いが止まらない。そして2人で笑いあった後、自分のことを神だと言う彼女に視線を移した。

「私とこのドールの能力は、心に触れることと、強制支配。それと私が元々もってた創る力を応用して、あなた達の心から擬似世界を創ったのよ。ココの翔くんには希望を、臯くんには恐怖を、臯ちゃんには絶望を、キミには幸せを、ね」

翔と臯の視線を受けた彼女は肩を竦めてみせる。

「それってどういう……？」

あれ？　　なんだか1人だけ取り残されている気がするのだが……。

「それぞれが一番染みる世界を創って、あなた達を飛ばしたのよ。

そうね。例えば、あなた、月見里翔は辛いことをあたえても屈しようとしなないじゃない？　　けれど、幸せには弱いんだよ」

えーと、うん……。今までの世界は精神攻撃とかそういう類のことらしい……。

「あの世界は事実なの？」

口に出したのは臯だった。口調からして、オレたちの世界の臯だろう。

「いいえ、と答えるのが適当なのかしらね。あくまでも心から創りだした擬似世界。あなたにとっての絶望は、あの光がなかったらという心の不安だったのね。安心して、あの光は事実だから」

光……？ 何のことだろう？ 臯のほうを向くと顔を真っ赤にして、こちらをちらちらと……。

あえて口には出さないが、お前今は男の姿だからな……。

「けど、おかしくないか？ あれがオレの心から創った世界で、今の話からすると、心が事故らなかつたところから、オレの望んでた幸せだろ？」

「え、ええ。それで合ってるわよ？ 心ちゃんが怪我しないで2人で幸せになるのがあなたの望んでた幸せ。しかし、ホントにイレギュラーよね。あなたたち。こっちの翔くんは一瞬もそれを希望だとは思わなかつたし。臯くんは恐怖が恐怖ですらなかつたみたいだし。臯ちゃんは絶望どころか、それを強さに変えてみせるし。キミは何？ キミが戻って来れた理由だけはわかんないし。ホント嫌になるわ」

と彼女は地団駄をふむ。それを面白がるような目で見ているのはこの世界の臯だ。

「だから、イレギュラーだから、オレたちに話す気になつたんだろっ？」

「そうね、さつき確かめたけど、この世界はもう未来をなくしたみたいだし。あ、未来がないとか、終わるとかつて意味じゃないわよ？ この世界に決められた行く先がなくなっただけ。だから頼るなら未来へ分岐してない今しかないもの」

何の話をしているのかはわからない。ただ、彼女は「キミが戻って来れた理由だけはわかんない」と言った。

他の3人とは違う。オレは幸せを受け入れようとしなかったわけじゃない。あの世界が本物だと信じようとしたじゃないか。

「だって、だってオレは……あの手を離すことができなかった。あの最上心があいつじゃないことがわかって、離すことができなかった」

「たじやないか」

「気が付くと自分の暖かくなつた掌を見つめていた。」

「え？ じゃあ、何で……。キミは……。？ キミがそれを幸せであつて欲しいと望む限り、あの世界はあなたの幸せだったはず。キミが過去を思い出したとしても、キミがその幸せをとつたのなら何で……？」

彼女にもわからないことがあるんだな。彼女の言い方からすると、その世界を 例えば、絶望の世界なら絶望を、絶望だと思わなければ、その世界から出られるということだろうか……。

「だとしたら……。オレは、なんで……？」

「ルシファー、最上心のこと、こいつには……」

不意に声をだしたのはこの世界の翔だった。

「へ？ ええ、わかつてるわよ。今の状態が最善なら、不安要素は作りたくないもの」

「最上心のこと……。？ まだ、オレは知らないことが、思い出してないことがあるのか……？」

「それと、えっと、別の世界のオレ？ お前、昔のこと思い出したんだよな？ もしかして、最上心は

、その……。自殺じゃないか？」

「そ、そうだけど……？」

「ルシファー、最上心は、その……。自殺なのか？」

「え？ 死因……。？ そんなの気にしたことなかったけど、でも……。ちよつと待つて」

そう言い残すと彼女は視界から消えた。ルシファーって名前だったのか。『ルシファー』 魔界の王、堕ちた天使、だったか。世界を創つた彼女が魔王と呼ばれるなんてな。彼女は自分が魔王と呼ばれていることを知っているのだろうか。知っていて、世界を救おうとしているのだろうか。

「……月見」

何かを考え込んでいたのだろうか。振り向くと直ぐ近くに皐の顔があった。

「何を悩んでいるのか知らないけど。辛いこと思い出したんでしょ？ だったら泣けばいいんじゃないかな？ こっちに帰ってから、月見、泣いてるみたいなのに泣かないんだもん」

励ましてくれているのだろうか。皐の紅い瞳は、本気で心配してくれているのか少し潤んでいるようで、それにとってもキレイだった。「……月見はボクの光だから。光が曇ってたんじゃない、また濁ってしまっから」

ぼそぼそと呟かれた皐の声は聞き取れなかったけれど、皐の顔が更に近づいてきて、聞き返すことができなかつた……。

えっと、これって……キス？ 赤くなつた顔に、同じ様に顔を赤くした皐の……その唇が近づいて

「ちょ、ちよつと待て、お前、今は男だからな……！？」

「あはは、冗談だよ」

離れていった皐の笑顔はとても可愛らしかつた。もちろん、

男の皐の顔が、ではなく、本来の女の子の皐の顔を想像して、だ。

「うん、それじゃ、ルシファーが戻るまで、ボクたちの考えをまとめようよ」

皐は手を叩いてそう言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9533j/>

リアン 壊れた記憶と絆の世界

2010年10月8日13時56分発行